

## 平成 25 年度 学術振興基金助成による成果報告書

平成 26 年 3 月 30 日

学 長 殿

所属部局・職名 人間発達文化学類・学類長

申 請 者 名 千葉 養伍

助成事業の区分 (該当するものに○印)	研究協力に関する事業 (学術出版・叢書・学会等) 学術振興に関する事業 (学生・事務職員・ <u>その他の特別事業</u> )
事 業 名	高度なアクティブ・ラーニングに関する視察調査
事業実施期間	平成 25 年 10 月 ～ 平成 25 年 11 月
成 果 の 概 要	<p>平成 25 年 10 月 28 日～10 月 31 日に、アメリカのウィスコンシン大学オークレア校教育人間科学部 (College of Education and Human Sciences)に出かけ、アクティブ・ラーニングに関する視察調査を行った。</p> <p>具体的には、下記の授業を参観し、担当教員から話を聞いた。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>Chem103</b> 70～80 名の教養教育の化学。練習問題を 2 人一組のペアで取り組ませ、一人が解答し、他の一人が説明を受ける協働学習を取り入れていた。また、クラスにはボランティア学生のアドバイザリーボードを置き、授業改善に役立てていた。</li> <li>・ <b>ES317</b> 3 名×6 グループで行う教育方法の授業。「5E's (5 つの E) (Engage, Explore, Explain, Elaborate, Evaluate) の手法」に従い、協働学習において、どのように生徒の学習を活動的に組織していくかについて学習していた。グループでの作業が多く、学生は活発に発言していた。</li> <li>・ <b>WRIT114</b> 15 名弱のライティングの授業。テーマに沿ってレポートをまとめるときの書き方を扱っており、ソフトを使ってインターネット上の情報を効率的に収集する方法についても指導していた。</li> <li>・ <b>ES309</b> 30 名弱の教育方法の授業。教員に必要な心理的資質について。学生と会話をして身近な具体例を挙げながら進めていた。</li> <li>・ <b>ES212</b> 4 名×5 グループで行う教育方法の授業。モチベーション (学習の動機付け) について扱い、その定義や習慣化するための要素、おもしろさの功罪など幅広く解説した。途中小休止を挟んだ 110 分の授業であり、具体例をあげながら説明し、学生との会話や学生グループでの作業も多かった。</li> </ul> <p>また、授業を受講している学生 5 名からアクティブ・ラーニングの効果について、ヒアリングした。学生からは、講</p>

義の授業に比べて授業自体に積極的に参加するし、集中できる／授業で実践することで実際の場面（教師となって生徒を指導するとき）にどう関わったらいかががわかる／授業の内容が自分の記憶に残り身につく／ただ授業を聞くよりも学生同士で教えあうことにより理解が深まる／授業前の予習をきちんとやらないとクラスに参加できない・他の学生に迷惑がかかる／表面的・初歩的な知識は講義で得られるが、深く理解するにはアクティブ・ラーニングが効果的である／などの意見が聞かれた。

オークレア校にアクティブ・ラーニングを導入した元 CETL (Center for Excellence in Teaching and Learning ; 高等教育センター)センター長へもヒアリングを実施した。CETL は 2008 年に設立され、学生を積極的に学習させること(Student Engagement)を重視して教員の FD 活動を行って来た。具体的には、Discussion Groups (講読グループ)で本を読み合わせて学習会をしたり、Communities of Practice (実践グループ)でテーマを決めて教授法の工夫を考えて実践したりしている。その他、教員の相談窓口の設置、教育機器等(クリッカーやオンライン指導)の紹介、外部講師による講演等も行っている。

アクティブ・ラーニングは、FD 活動の一環として取り入れられており、読書会での学習を経て、学期の授業で実践し、その効果について継続して交流・情報交換をしているとのことであった。

さらに、オークレア市内の Altoona 高校の生物の授業も参観した。ここでは、生徒 2 人一組でそれぞれ興味のあるテーマを設定し、生物の「組織」についての実験を進めていた。アクティブ・ラーニングをすることで、生徒が熱心に取り組み、生徒同士のコミュニケーションがとれ、クラス作りにも役立つと担当教員は話していた。

アクティブ・ラーニングについて、Dr.Kolis の言葉が印象的であった。「アクティブ・ラーニングの解釈は人それぞれに異なり、全教員で一斉に行うのは非常に難しいが、少数でもまずは始めるのが大事である。どんな定義とするかによってこの先 10 年間の教育が規定されるので、始めるにあたっては共通のゴールを具体的に定め、常にゴールを確認しながら進めるのが重要」とのことであった。Dr.Kolis は、アクティブ・ラーニングを”A change in thoughts, beliefs, or actions”と考えているそうである。

この視察結果については、将来計画検討委員会(11/12)や学類教員懇談会(12/3)で報告会を実施し、アクティブ・ラーニングに対する教員の理解を深めた。